

生活科と社会科との接続・発展を図る授業構成に関する基礎的研究 —実践史研究の視角から—

伊藤 裕康*

A Basic Study on the Lesson Composition which Aims at Connection and Development Between Life Environment Studies and Social Studies: From a Viewpoint of a Historical Study on the Practice

Hiroyasu ITO

要旨 生活科と社会科との接続・発展に関わる先行実践・研究の動向を俯瞰し、次の6点の両教科の接続・発展を図る授業づくりに係わる知見を抽出した。①生活科は、社会科等の準備教科ではないという前提に立ち、生活科固有の論理を大切にす。②生活科では、空間認識、時間認識、政治認識、経済認識、環境認識、異文化認識という社会科に直接発展する要素を含んだ学習が可能である。③生活科では、「たんけん」学習を大単元で構想し、もの・こと・ひととの関わりを深めつつ、様々な表現活動を行ない、空間的認識だけでなく、②の様々な認識の形成に努める。④生活科と社会科との接続・発展を図る授業づくりに関わる従来の優れた研究及び実践に学び、授業開発に生かしていく。⑤生活科と社会科との研究交流を行ない、互いの成果を学び合い、授業開発に生かしていく。⑥平成の大合併により行政域が広域化したことを踏まえ、同じ市町村にある学校と③の成果を交流し合い、わたしたちのまち意識を育成する。

キーワード：生活科，社会科，生活科と社会科との接続・発展，授業構成，実践史研究

I. はじめに

課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）が求められ、自己肯定感や学習意欲，社会参画の意識を高める必要性が言われるが，これらは，従来から生活科が一貫して重視してきたことである（野田2015）。また，全国学力・学習状況調査結果から，総合的な学習の趣旨に即した学習活動に取り組む子どもほど，平均正答率が高いことが明らかとなっている。近年，総合的な学習の時間及びそれと深く関わる生活科が再評価されている（田村2015）。

生活科の再評価にともない，今後は質のより高

い生活科授業展開が問われて来る。そのためには，他教科・領域との接続を踏まえた生活科授業展開が求められる。さらに，他教科・領域でも生活科との接続・発展を図る授業展開が求められるよう。特に，生活科誕生の経緯もあり，生活科と社会科との接続・発展を図った授業が求められる。実際，平成29年版小学校学習指導要領解説生活編は，「社会科や理科，総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続を明確にすること。単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ，育成を目指す資質・能力や『見方・考え方』のつながりを検討することが必要である。」と述べられている。

今，生活科と社会科との接続・発展に係わる知

* いう ひろやす 文教大学教育学部学校教育課程社会専修

見の豊饒化が求められる。しかしながら、筆者は、そのような知見を両教科の先行実践・研究の動向を俯瞰して抽出する試みは寡聞にして知らない。そこで、本研究は、生活科と社会科との接続・発展に関わる研究の動向を見ていきながら、生活科と社会科との接続・発展を図る授業のあり方に関する基礎的知見を得ることを、目的とする。

Ⅱ. 生活科と社会科との接続・発展に係わる研究の展開

1. 生活科と社会科との接続・発展に係わる研究等の動向 学術雑誌及び書籍から生活科と社会科との接

続・発展に係わる研究を、表1にまとめた¹⁾。

研究の立場が、社会科教育関係か生活科教育関係かは、著者の出自や担当及び掲載誌の性格から判断した。なお、中野重人のように、元来社会科出自の研究者であり、社会科教科調査官から初代生活科教科調査官となったように、低学年の社会科と理科を廃止して、生活科が新設されたが故に、元々の出自が社会科関係であって生活科の実践や研究を(も)する者も多く、表1のように両者に位置付く研究が多くあった。

表1 生活科と社会科との接続・発展に係わる研究の動向

年次	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究(社会科教育関係)	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究(生活科教育関係)	生活科教育に係わる教育等の動向
1986 昭和61			・「小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議、審議のまとめ」(7月)にて、初めて「生活科」の名称が公式に使用
1987 昭和62			・「教育課程審議会答申」(12月)、低学年社会科と理科の廃止が決定。
1988 昭和63	・安藤正紀「『生活科』への実践的アプローチ」 地理学報告66, 1-11		
1989 平成元	・西裏慎司「社会科の初志をつらぬく会の小学校低学年社会科授業実践における学習指導方法論-生活科における学習指導方法論の活用をめざして-」 社会系教科教育学研究1, 43-47		・学習指導要領改訂, 生活科新設。 ・生活科授業研究会発足。
1990 平成2	・中野重人編『3年・生活科と関連づけた「地域学習」』 明治図書, 109p. ・安藤正紀「生活科におけるカリキュラム開発」 地理学報告70, 69-78 ・岩田一彦「『生活科』における社会認識形成の理論」 社会系教科教育学研究2, 13-18 ・峯岸由治「社会認識の育成における社会科と生活科の関連-『生まれたころのぼく・わたし』を手がかりに-」 社会系教科教育学研究2, 19-23 ・軍司幹光・小林修・神永典郎「『生活科』をふまえた社会科の授業と研究の視座-『具体的な活動や体験』をとりいれた新単元開発の試み-」 茨城大学教育実践研究10, 291-307	・中野重人編『3年・生活科と関連づけた「地域学習」』 明治図書, 109p.	
1991 平成3	(・赤木直行「生活科における遊びと認識形成」 社会系教科教育学研究3, 9-14)		・生活科教育研究会発足。
1992 平成4	・谷本美彦「生活カリキュラムにおける生活科・社会科論とその展開の考察-福岡第二師範学校男子部附属小学校第二部プランの分析を中心に-」 社会科研究40, 138-112		・日本生活科教育学会発足。 ・生活科全面実施。 ・全国小学校生活科教育研究協議会発足。

年次	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（社会科教育関係）	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（生活科教育関係）	生活科教育に係わる教育等の動向
1992 平成 4	(・原堅「子どもの意識の連続性を基本原理とした生活科授業の改善－生活科研究推進校の授業実践を手がかりとして－」社会系教科教育学研究 4, 43-48)		
1993 平成 5	・岩本廣美・寺本潔・池俊介編『子どもが“ノッ”ってくる「探検授業」のつくり方－生活科から社会科へ－』日本書籍, 190p. ・末政公徳 (1993)『生活科と社会科の関連を深める授業づくり』明治図書, 151p. (・馬野範雄「『子ども文化』の創造における活動の構成方法－第2学年生活科『秋を楽しもう』の実践を通して」社会系教科教育学研究 5, 7-12) (・堤豊「子どもが成就感を味わう生活科学習－第2学年単元『ミニ星野川をつくろう』の実践を中心に－」社会系教科教育学研究 5, 58-19)		
1994 平成 6	・奥住忠久・西村公孝編著『小・中・高一貫の公民形成カリキュラム研究・開発と実践－生活科・社会科・公民科の関連性をめざして－』中部日本教育文化会, 242p. ・中野照明「社会認識を踏まえた生活科授業の内容構成－『歴教協』低学年社会科実践の変遷を手がかりに－」社会系教科教育学研究 6, 9-14	(・丹伊田弓子「学習活動に必然性と連続性を生み出す『活動活性化単元』－『たのしいよ すてきだよ ぼくたち わたしたちの町』せいかつか創刊号, 10-15) (・無藤隆・山田誠「場所への愛着を核とした生活科の授業」せいかつか創刊号, 92-97)	・日本生活科教育学会機関誌せいかつか創刊. 特集:「生活科の授業作り」「私の授業の見方」
1995 平成 7	・寺本潔「小学校における児童の地理的空間認識の育成と評価」地理科学50-3, 172-177	・寺本潔「小学校における児童の地理的空間認識の育成と評価」地理科学50-3, 172-177	・阪神・淡路大震災(1月) ・せいかつか2特集:「私の授業づくり」「新潟大会から学ぶもの」
1996 平成 8	・關浩和「方法的能力を育成する生活科の授業構成」社会系教科教育学研究 8, 63-70 ・伊藤裕康 a「社会認識教育の体系化に関する基礎的研究－社会科と生活科との相互関連・発展の視点から－」社会科研究44, 21-30 ・伊藤裕康 b「『新しい学力観』・『生きる力』と社会科・生活科」広島文教女子大学紀要31巻, 139-156 ・片上宗二「生活科実践の課題と方向」せいかつか3, 42-46 ・加藤寿郎「生活科の学力と授業構成」せいかつか3, 62-67 ・宮本光雄編著 (1996)『生活科と社会科の接続・発展－その理論と実際－』東洋館出版, 216p.	(・渡部万美江「自分らしさをお互いの中で生かすことのできる子供たち一場面におけるエピソードの累積・分析を通して」せいかつか3, 26-33) (・溝辺和成「教室の新たな知の構築をめざして－生活科授業改善に向かう視点」せいかつか3, 37-41) ・片上宗二「生活科実践の課題と方向」せいかつか3, 42-46 ・加藤寿郎「生活科の学力と授業構成」せいかつか3, 62-67	・せいかつか3特集:「私の授業づくり」「これからの生活科を考える」
1997 平成 9	・伊藤裕康 a「生活科との相互関連・発展を図る小学校3年生社会科の授業構成－単元『町のうづりかわり』を事例に－」広島文教教育11巻, 41-54 ・伊藤裕康 b「生活科が地理教育の変革に示唆するもの－社会認識教育の体系化をめざして－」社会系教科教育学研究 9, 63-70 ・岩本廣美・櫻本豊己・鈴木洋子・谷口義昭・鳥居春己・前田喜四雄・向山玉雄・増田信一「生活科における教科書分析」奈良教育大学教育実践研究センター研究紀要 6, 139-161	(・松田智子「生活科教育がどこまで学校教育をかえる可能性を持つか－新たな防災教育を生活科は担えるか」せいかつか4, 16-21)	・せいかつか4特集:「育つ子どもの姿の読みとり」「新しい単元作りの発想」「大学における生活科教育の受けとめ方」
1998 平成10	伊藤裕康「活動が深化する生活科の授業構成」社会認識教育学研究13, 1-11	(・小笠原扶久美「地域のよさを味わい、学ぶ力を育む生活科の授業－交流学习を核とした大単元構想の試み」せいかつか5, 16-21)	・せいかつか5特集:「子どものかかわりと支援」「合科・総合と生活科の可能性」「現職教員の研修」

第Ⅰ期 生活科授業模索期

年次	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（社会科教育関係）	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（生活科教育関係）	生活科教育に係わる教育等の動向
1998 平成10			・学習指導要領改訂、生活科の目標に「人々」という文言を追加。 ・総合的な学習の時間が小学校3年生以上に新設。
1999 平成11	・朝倉淳・石井信孝「空間認識の育成をめざす生活科の授業構成（Ⅰ）－小学校第2学年『町探検』を内容とする探検を事例として－」学校教育実践学研究第5巻, 53-62 ・水野雅夫「生活科実践『春さがし』における地理教育的視点」地理学報告88号, 100-106	・朝倉淳・石井信孝「空間認識の育成をめざす生活科の授業構成（Ⅰ）－小学校第2学年『町探検』を内容とする探検を事例として－」学校教育実践学研究第5巻, 53-62	・せいかつか6特集:「これからの生活科」「幼児教育から生活科・総合へ」「生活科から『総合』への可能性を考える」 ・岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄『分数のできない大学生－21世紀の日本が危ない』東洋経済新聞社により学力低下論争。
2000 平成12	・朝倉淳・石井信孝「空間認識の育成をめざす生活科の授業構成（Ⅱ）－小学校第1学年の校舎における空間認識を通して－」学校教育実践学研究第6巻, 59-67	・朝倉淳・石井信孝「空間認識の育成をめざす生活科の授業構成（Ⅱ）－小学校第1学年の校舎における空間認識を通して－」学校教育実践学研究第6巻, 59-67	・せいかつか7特集:「生活科から総合へのつながり」「子どもの変化と生活科」 ・日本生活科学会を日本生活科・総合的学習教育学会に改称（6月）。
2001 平成13		(・生石正観「生活単元『電車ごっこをしよう』をめぐる』せいかつか&そうごう9, 46-55)	・せいかつか&そうごう8特集:「子どもの見取りと支援」「単元開発の創意工夫」
2002 平成14	・木全清博「社会認識の基礎を育てる生活科実践の検討」滋賀大学教育学部教育実践センター紀要10, 55-68 ・和田善広「空間認識や労働認識を育てる生活科実践」社会科教育の創造9, 27-38 ・中山京子「低学年総合学習から社会科への発展－社会認識の育ちを視点として－」社会科教育研究87, 30-40 ・伊藤裕康「場所への愛着をはかる生活科の授業」香川大学教育学部研究報告第1部117, 1-14 ・戸田善治「生活科・総合世代の子ども」に対応した社会科授業研究の視点－授業研究の主体者を中心にして－」社会科教育研究87, 41-48		・せいかつか&そうごう9特集:「新生・総合的学習の創始に向けて－生活科との関連を見据えて」「特色ある単元の開発と実践」
2003 平成15		・無藤隆「生活科の授業から始めるカリキュラムづくり」せいかつか&そうごう10, 4-11 ・嶋野道弘「生活科における学習の成立と評価」せいかつか&そうごう10, 46-53	・せいかつか&そうごう10特集:「生活科・総合的学習のカリキュラムづくり」「生活科・総合的学習の評価の考え方と方法」 ・PISAショック。 ・平成の大合併のピーク(2003年-2005年)。
2004 平成16	・峯岸由治「社会認識の形成と生活科－小一生活科授業『みそしるばあてい』を手がかりに－」社会系教科教育学研究16, 21-28		・せいかつか&そうごう11特集:「子どもの育ち」「授業研究」「カリキュラム実践上の課題」
2005 平成17	・坂井誠亮「知的な認識形成をめざす生活科の授業設計－『知的な気付き』を深める学習過程と指導に活かす評価－」社会系教科教育学研究17, 53-60		・せいかつか&そうごう12特集:「授業力の向上」 「生活科・総合的な学習の新たな価値を問う」

第Ⅱ期総合の確立及び総合と生活科との接続模索期

年次	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究 (社会科教育関係)	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究 (生活科教育関係)	生活科教育に係わる教育等の動向
2006 平成18			・せいかつか&そうごう 13特集:『『学力低下』論争と生活科・総合的学習』 「協同性が高まる学び」
2007 平成19	・内藤博愛・朝倉淳・溝部和成・須本良夫・樽谷秀幸「生活科におけるキャリア教育の構築」 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要第35, 125-134 ・永田成文・別府志保「生活科において求められる学力の変遷-社会とのかかわりに焦点をあてて-」 三重大学教育学部研究紀要58, 53-167	・内藤博愛・朝倉淳・溝部和成・須本良夫・樽谷秀幸「生活科におけるキャリア教育の構築」 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要第35, 125-134	・せいかつか&そうごう 14特集:「生活・総合における『授業力』」 「幼保小連携と生活・総合」
2008 平成20	・内藤博愛・朝倉淳・神山貴弥・須本良夫・樽谷秀幸「生活科におけるキャリア教育の構築Ⅱ」 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要第36, 211-219 ・關浩和「教育課程における生活科の存在意義-比較・分類思考形成をめざす生活科授業に-」 社会系教科教育学研究20, 11-20	・内藤博愛・朝倉淳・神山貴弥・須本良夫・樽谷秀幸「生活科におけるキャリア教育の構築Ⅱ」 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要第36, 211-219	・学習指導要領改訂, 生活科の目標に自分自身に関することが加わり, 四つの目標で構成される. 気付きの内容では「地域の良さ」, 「自然のすばらしさ」, 「自分のよさや可能性」という文言が追加. ・せいかつか&そうごう 15特集:「学習指導要領改訂の方向と生活科・総合的な学習」
2009 平成21	・内藤博愛・朝倉淳・神山貴弥・須本良夫・樽谷秀幸「生活科におけるキャリア教育の構築Ⅲ」 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要第37, 325-330 ・水野雅夫「生活科における地理的能力及び安全意識の育成-2年生「通学路の安全チェック」の実践を通して-」 地理教育研究3号, 43-50	・内藤博愛・朝倉淳・神山貴弥・須本良夫・樽谷秀幸「生活科におけるキャリア教育の構築Ⅲ」 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要第37, 325-330 ・加藤亜美「生活科における『地域への愛着』の基盤を築くための一考察-主に名古屋市での実態調査を通して-」 生活科・総合的学習研究7, 123-132 ・野田敦敬・加藤亜美「都市部における『地域への愛着』の基盤を築く生活科学習」 愛知教育大学教育実践センター紀要13, 67-74	・塩谷文科大臣が「ゆとり教育」への反省を口に, 新しい学習指導要領の一部が先行実施(4月). ・せいかつか&そうごう 16特集:「授業をどう変える-どう変える-新学習指導要領の視点」 「校種間連携の学びと育ちの連続性」
2010 平成22		・加藤亜美「『地域への愛着』の基盤を築く生活科学習-都市部における第2学年『秋の町探検』の授業実践を通して-」 生活科・総合的学習研究8, 123-132	・せいかつか&そうごう 17特集:「今改めて教育課程における生活科・総合的存在意義を問う」
2011 平成23			・東日本大震災(3月) ・せいかつか&そうごう 18特集:「教育諸学の立場から見た生活科・総合的意義と課題」
2012 平成24	・峯岸由治「社会的物質代謝を視点とする生活科授業構成の性格-小2生活科授業実践『ぶどうものがたり』を手がかりに-」 社会系教科教育学研究24, 1-10	・猪熊泰堂「地域への愛着を育む総合的な学習に関する研究-問題解決学習に基づいた分析を通して-」 生活科・総合的学習研究10, 31-38 ・大島祐太「生活科において空間認識を育成するための絵地図学習に対する研究」 生活科・総合的学習研究10, 77-82	・せいかつか&そうごう 19特集:『『生活・総合で育つ子どもたち』-『生活・総合の理念』を一貫して重視する学校からの提言-」

第Ⅲ期 生活科と総合的学習の意義模索及び社会認識形成意識期

年次	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（社会科教育関係）	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（生活科教育関係）	生活科教育に係わる教育等の動向
2013 平成25	<ul style="list-style-type: none"> ・木村瑛「空間認識を広める生活科の授業実践」地理教育研究12, 49-56 ・寺本潔「小学校低学年生活科における子どもの空間認知の形成—指導の課題と改善の方策—」玉川大学教師教育リサーチセンター年報第3号, 15-23 	<ul style="list-style-type: none"> ・大島祐太「生活科で『空間認識』を育成するための実践的研究—第2学年『まち大すき』の実践を通して—」生活科・総合的学習研究11, 77-86 ・寺本潔「小学校低学年生活科における子どもの空間認知の形成—指導の課題と改善の方策—」玉川大学教師教育リサーチセンター年報第3号, 15-23 	<ul style="list-style-type: none"> ・せいかつか&そうごう 20特集:「生活科研究の課題と展望—20年間を振り返って—」
2014 平成26	<ul style="list-style-type: none"> ・菊池達夫「小学校生活科における身近な地域素材を活かす授業開発」地理教育研究14, 73-77 		<ul style="list-style-type: none"> ・せいかつか&そうごう 21特集:「『総合的な学習の時間』研究の課題と展望—10年間を振り返って—」
2015 平成27	<ul style="list-style-type: none"> ・末永琢也「子どもの発見的認識を形成する生活科授業開発—第2学年単元『まちのこうえんしらべたい』の場合—」社会系教科教育学研究27, 71-80 		<ul style="list-style-type: none"> ・せいかつか&そうごう 22特集:「生活科・『総合的な学習の時間』と学力」
2016 平成28	<ul style="list-style-type: none"> ・上之園公子・石田浩子「地図の活用を位置づけた生活科の授業構成（1）—小学校第2学年『町探検』の単元を事例として—」比治山大学紀要23号, 145-153 	<ul style="list-style-type: none"> ・加納誠司「社会的な見方・考え方につながる生活科の実践的研究—空間・愛着・自己実現を手がかりに—」愛知教育大学研究報告65(教育科学), 17-24 ・松田智子・山田均「生活科から小学校社会科への連続性の一考察—防災教育と減災教育に視点をあてて—」奈良学園大学紀要5, 141-150 ・上之園公子・石田浩子「地図の活用を位置づけた生活科の授業構成（1）—小学校第2学年『町探検』の単元を事例として—」比治山大学紀要23号, 145-153 	<ul style="list-style-type: none"> ・せいかつか&そうごう 23特集:「生活科・『総合的な学習の時間』と学力—その2—」
2017 平成29	<ul style="list-style-type: none"> ・原田信之・酒井達哉・宇都宮明子「歴史意識の基礎を育成する生活科授業開発—学校の今と昔に着目して—」人間文化研究第27号, 119-142 ・上之園公子・石田浩子「地図の活用を位置づけた生活科の授業構成（2）—小学校第1学年『学校探検』の単元を事例として—」比治山大学紀要24号, 139-146 ・上之園公子「小学校教科書における地図の活用に関する調査—小学校第2学年生活科を例として—」比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究第3巻, 30-36 ・藤永豪「教科書にみる生活科と社会科地理的分野における自然環境に関する学習内容」佐賀大学教育実践研究第35号, 43-55 	<ul style="list-style-type: none"> ・原田信之・酒井達哉・宇都宮明子「歴史意識の基礎を育成する生活科授業開発—学校の今と昔に着目して—」人間文化研究第27号, 119-142 ・上之園公子・石田浩子「地図の活用を位置づけた生活科の授業構成（2）—小学校第1学年『学校探検』の単元を事例として—」比治山大学紀要第24号, 139-146 ・上之園公子「小学校教科書における地図の活用に関する調査—小学校第2学年生活科を例として—」比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究第3巻, 30-36 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領改訂, 「指導計画の作成と内容の取り扱い」において, 「中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにする」ことを付加。 ・せいかつか&そうごう 24特集:「生活科・『総合的な学習の時間』と学力—その3—」
2018 平成30	<ul style="list-style-type: none"> ・村上典章「生活科における空間認識育成のための活動に関する考察」広島文教教育第32巻, 97-102 ・小林昌美「松戸市における低学年児童の空間認識の発達傾向の考察をもとにした教員養成課程における力量形成の方法についての考察」新地理66-2, 1-21 	<ul style="list-style-type: none"> ・斉藤和貴「生活科における『子ども地名』の教材価値に関する考察」せいかつか&そうごう25, 78-87 	<ul style="list-style-type: none"> ・せいかつか&そうごう 25特集:「新学習指導要領から考える生活科・総合的な学習の時間の継承と刷新」
2019 平成31 令和元		<ul style="list-style-type: none"> ・西野雄一郎・中野真志「生活科と社会科への接続と発展に関する研究—小学校3年来の社会科の実践を手がかりとして—」愛知教育大学研究報告. 教育科学編68, 1-8 	<ul style="list-style-type: none"> ・せいかつか&そうごう 26特集:「生活科・総合的な学習の時間を中核としたカリキュラムマネジメント」

第Ⅳ期生活科と総合的学習の意義再確認・社会科との接続模索期

年次	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（社会科教育関係）	生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（生活科教育関係）	生活科教育に係わる教育等の動向
2020 令和2	・石橋昌雄「資質・能力の育成を確かなものにする生活科の指導法—社会科との接続・発展を見据えた『まちたんけん』—」立正大学社会福祉研究所年報第22号, 27-44	・大村龍太郎「生活科の『見方・考え方』から芽生える中学年教科等の『見方・考え方』の自覚を促す教師の構えと関わり—社会科・理科・総合的な学習への接続の視点から—」せいかつか&そうごう27, 52-63	・せいかつか&そうごう27特集:「育成を目指す資質・能力と生活科・総合的な学習の時間」

2. 生活科と社会科との接続・発展に関する研究の展開過程

生活科と社会科との接続・発展に関する先行研究から見た生活科教育の展開過程は、学習指導要領改訂を指標に、4期に区分できる。第Ⅰ期が生活科授業模索期（1986（昭和61）年～1997（平成9）年）、第Ⅱ期が総合の確立及び総合と生活科との接続模索期（1998（平成10）年～2006（平成18）年）、第Ⅲ期が生活科と総合の意義模索及び社会認識形成意識期（2007（平成19）年～2015（平成27）年）、第Ⅳ期が生活科と総合の意義再確認・社会科との接続模索期（2016（平成28）年～）、である。これは、生活科教育側から見たものである。社会科教育側から見れば、終始低学年における社会認識形成が問題にされている。

1) 第Ⅰ期：生活科授業模索期（1986（昭和61）年～1997（平成9）年）

新設の生活科では、生活科教育推進の立場からは、教科の確立が喫緊の課題であった。それは、日本生活科学会の機関誌『せいかつか』創刊号から第4号までの特集の一部が、「生活科の授業作り」、「私の授業の見方」、「私の授業づくり」、「私の授業づくり」、「育つ子どもの姿の読みとり」、「新しい単元作りの発想」であることからうかがえる。まず、生活科授業確立が目指され、その観点から研究が進められた²⁾。生活科教育側からの研究で、タイトルそのものに「社会認識」や「社会科」が付くものは皆無である。生活科と社会科との接続・発展へのまなざしは、生活科教育側からは弱いと思われる。そんな中、第Ⅲ期以降における社会科との接続の重要な鍵概念となる「場所への愛着」に着目した無藤・山田（1994）

が、注目される。ただし、場所への愛着は、既に、子どもの手描き地図の研究を精力的に行った地理教育研究者の寺本（1993）が、「原風景と原体験」や「風景への愛着」として問題にしていたことである。

第Ⅰ期に限らないが、社会科教育側には、低学年社会科廃止によって、低学年における社会認識形成が疎かにならないかという危機感が常にあった。社会科の初志をつらぬく会（以後初志の会）や歴史教育者協議会の低学年社会科の優れた実践に学ぶ有効性や生活科で意図的に社会認識形成を図る必要性が説かれた（西裏1989, 中野1994）³⁾。「生活科の授業を、社会や自然の事象の客観的な理解によって、知的な探求心の形成や探究方法の習得を意図する授業に改造していくことが必要である」（峯岸1990）という、生活科への厳しい声に、これ以降、生活科教育側は応えていくことが求められた。

書名に「生活科と社会科との接続・発展」等に係わる文言がある専門書が、第Ⅰ期に集中して刊行されている。その多くが、社会科教育関係者からのものである（中野1990, 岩本・寺本・池1993, 末政1993, 隼住・西村1993, 宮本1996）。この中で注目されるのが、寺本・池（1993）である。氏等は、生活科新設を好機と捉え、「自分」の世界を育成する観点から「探検」を基軸とした地理学習の提案をした。この時期、岩本・寺本・池等は、研究グループをつくり、生活科を踏まえた地理学習にかかわる提言を活発に行った（岩本1989, 寺本・池1990）。同グループの生活科における地理教育実践の成果に、安藤（1991）がある。また、寺本（1995）を踏まえた伊藤（1997b）は、

生活科の成立を受け、社会科教育のあり方を再考し、地理教育の観点から社会認識形成の体系化を考察し、地理的感覚の錬磨の必要性を説いた。これ以後、このような傾向の研究はなく、これらの研究を深めていくことが今後の課題である。

生活科と社会科との連携の立場から伊藤(1996a)は、生活科と社会科の相互関連・発展を図る道筋を考察した。伊藤(1996a)では、生活科では、知識を活用して出力する出力型授業観⁴⁾に基づき、子どもが大いに自己中心的な考え方が強い「じまん」する授業を展開し、時には子どもが考えた「作戦のみがきあい」をすること、社会科では、子どもの思いを表出させる「じまん」の段階から「提案のみがきあい」までに深化させることが、生活科と社会科の相互関連・発展を図る事であることが示された。ここでは、自己中心的な考え方も許される「じまん」を鍵概念とした生活科から、社会の構成員への納得が求められる「提案」を鍵概念とした社会科へという、両教科の接続・発展の明確な流れが示されている。

ところで、第Ⅰ期では、社会科教育の側から生活科教育推進に係わった關(1996)、片上(1996)、加藤(1996)は、新教科である生活科で育成する学力への言及も行っている。

なお、1995年には阪神・淡路大震災があり、地域と学校とのあり方や授業そのもののあり方も少なからず問われたはずであるが、この点を意識したものは、松田(1997)のみであった。

2) 第Ⅱ期：総合の確立及び総合と生活科との接続模索期〈1998(平成10)年～2006(平成18)年〉

岡部・戸瀬・西村(1999)に端を発した「学力低下問題」が浮上し、PISAショックが起きたのが、第Ⅱ期である。「学力低下問題」の元凶に、生活科があげられた。生活科での学力形成についてのものは嶋野(2003)がある。『せいかつか』の特集で「学力低下問題」と直接係わるのは、「学力低下問題」が言われ出してからやや経過した2006年の第13号での「学力低下」のみである。

生活科と社会科との接続・発展は、「学力低下問題」に答える研究に成り得そうなのだが、生活科教育側からそれに応える研究も少なかった⁵⁾。生活科教育側の研究で唯一目立つのが、生活科での空間認識形成を図る朝倉・石井(1999, 2000)である。その朝倉・石井(1999, 2000)にしても、朝倉が論文発表当時、社会科出自の附属小学校教員であり、出自が社会科教員だったことが、空間認識形成への着目に繋がったと推測される。『せいかつか』の特集を見ると、平成10年度学習指導要領で小学校3年生以上に新設された「総合的な学習の時間」の確立と、その総合と生活科との接続の模索に研究の力点が置かれていたことが分かる。そのことが「学力低下問題」に対する回答が、直ちには生活科教育側から行なわれなかった理由の一つと思われる。

第Ⅱ期では、生活科の目標に「人々」という文言を追加され、「知的な気付き」の必要性が言われた。また、「地域の様々な場所」への愛着も打ち出されてもいる。そのことに対する反応は社会科教育側から主に出されている。例えば、伊藤(1998)は、寺本(1993)の循環を想定し構想した生活科学習活動過程の「じまん」→「たんけん」→「ひみつ」を、より活動が確実に深化することを意図し、「たんけん」→「ひみつ」→「じまん」→「しれい」にするとともに、一廉の者に「なることによって学ぶ」(〇〇名人になりきる)、ものづくり型の「しゅぎょう」→「ひけつ」→「じまん」→「しれい」の活動過程を提案している。さらに、伊藤(2002)では、場所への愛着を図り、企画力形成も意図した、「たんけん」から「りょこう」へという学習を提案している。中山(2002)は、低学年の総合学習は、空間認識、時間認識、政治認識、経済認識、環境認識、異文化認識という社会科に直接発展していく要素を含んだ学習であることを確認している。

3) 第Ⅲ期：生活科と総合の意義模索及び社会認識形成意識期〈2007（平成19）年～2015（平成27年）〉

第Ⅲ期になると、生活科教育側から社会認識形成を明確に意識した研究が精力的になされるようになる。それらの研究は、気付きの内容において「地域の良さ」という文言が追加され、気付きを深める方向性が平成20年度学習指導要領で示されたことが影響している（加藤2009, 野田・加藤2009, 加藤2010, 猪熊2012）。従って、社会認識でも空間的認識に係わるものが主である。それらの研究は、単に子どもの空間的認識を形成するのではなく、もの・こと・ひととの関わりを深める中で空間的認識が自ずと形成される立場をとる点に特徴がある。さらに、大島（2013）は、生活科で育成する「空間認識」は「意味空間」であることを述べている。しかし、「意味空間」に関わることは、既に、社会科教育側からの生活科の特性を生かした授業づくりと社会科との接続に関する提案のなかで、寺本（1995）や伊藤（1997b）も述べている。いずれにしても、生活科教育側から社会認識形成を明確に意識した研究の出現は、生活科固有の授業構成や生活科で育成する学力像の輪郭が明確になってきたことにも起因していよう。

また、『せいかつか』第22号と第23号とで連続して学力に係わる特集が組まれ、第Ⅱ期に問われた「学力低下問題」に対する生活科教育側からの研究も出されている。第Ⅲ期は、前述したように、生活科への再評価がなされ、生活科と総合の意義が明確化された（田村2015, 野田2015）。

社会科教育側では、末永（2015）が、生活科の学習活動が体験だけで終始する上に、中学年以上で実施される教科との関係性が曖昧だとして、発見的認識を形成する授業を開発した。だが、「公園をプランニングすることを意識づけた」とか、「公園の遊具や施設を配置する時に使われるゾーニングの視点を与え」等の記述から、学習活動を教員が仕切るような授業モデルの提案と感じられる。さらに、末永（2015）の公園のプランニン

グ自体、出力型授業観に基づく「提案する社会科」を提唱した小西（1992）が既にふれていることでもある。ここでは、生活科の授業は、教員が仕切るというのではなく、「子どもから引き出す教師の構えは、生活科において、これからも継承されるべき大切な教育観である」（神永2018）ことを、再確認しておきたい。なお、生活科と社会科との両教科に関わる朝倉や須本等により、生活科におけるキャリア教育の研究が進められたことも付記しておきたい（内藤・朝倉・溝部・須本・樽谷2007, 内藤・朝倉・神山・須本・樽谷2008, 内藤・朝倉・神山・須本・樽谷2009）。

4) 第Ⅳ期：生活科と総合の意義再確認・社会科との接続模索期〈（平成28年～）〉

第Ⅳ期では、第Ⅲ期から盛んとなった生活科教育側からの社会認識形成を意識した研究が引き続き行われている。そして、タイトルから分かるように、生活科と社会科の接続をより意識した研究が見られるようになった。これは、学習指導要領改訂の際、中学年以降の教育への接続が言及されたことが関わっていよう。特に、西野・中野（2019）は、小学校3年生社会科の町の様子の授業から、生活科との繋がりを意識した社会科授業づくり提案であることが注目される。従来、社会科教育側から社会科との接続を見据えた生活科授業づくりや生活科を受けての社会科授業をどうつくるかという提案はあったが、その逆はなかった。生活科教育側からの社会科授業づくりに対する初の提案である。子どもの学びの文脈に沿った社会科授業実践が展開され、参考になる。ただ、地図記号の指導場面は、子どもが自ずと地図の縮尺を利用して距離を測らせる伊藤（1993）を思い起こさせ、西野・中野（2019）の提案した趣旨につながるようなことは、既に社会科教育側でなされている⁶⁾。

第Ⅲ期と同様に第Ⅳ期も、生活科教育側からの接続・発展に関わる研究は、空間認識や場所への愛着に関わるものが多い。その中で、特に、加納（2016）は、空間認識につながる視点、地域への

愛着につながる視点、自己実現へつながる視点、の3視点を十分に育成するために、1つの単元に複数の内容を含め単元を構想する内容複合型単元を推奨していることが注目される。ただ、加納は「繰り返し探検に行くことで、その人と精神的な距離もしだいに縮まっていくだろう。その距離が短くなるにつれて、大きく膨らんでくるのが愛着ではないか。」とするが、これは既に寺本(1993)や伊藤(2002)が述べていることである。

空間認識や場所への愛着に関わるものが多い中で、防災教育と減災教育に視点をあてた松田・山田(2016)と子ども地名に着目の教科性を指摘した斉藤(2018)が注目される。特に、子ども地名がどう生成され、集団で共有され、学習活動で使用されるかの分析から、子ども地名の教材性を明らかにした斉藤(2018)は魅力的ではある。これを社会科へどうつなげるか、生活科と社会科との接続を考える者の課題となろう。ただ、斉藤(2018)の指摘した子ども地名の教材性に関わることは、社会科では、久保(1997)が、子ども達に地名のない坂を命名させる学習を行っている。久保実践は、「提案する社会科」関係の小西正雄編著(1997)『未来志向の社会科授業づくり』東京書籍に、「生活科のよさを生かす授業」として位置づいて収録されている。

石橋(2020)は、類似単元である「まちたんけん」を検討し、生活科から社会科へ接続・発展する際に生じる7点の段差(①たんけんの対象とする場所やものの違いによる段差。②たんけん「点」から、いきなり「面」を把握させようとする段差。③たんけんする地域の広さが異なることの段差。④独自の時間感覚から、順序だてた共通の時間感覚を捉えさせようとする段差。⑤地図の系統的な指導がなされていない段差。⑥たんけんなどの直接体験から、資料の読み取り中心の学習への段差。⑦たんけんを繰り返してまちの人に親しみや愛着をもつことと、少ない見学でまちや市の一員としての愛情を育むことの段差。)を明らかにした。その上で、この段差を克服する指導法

とカリキュラムを提案した。

ところで、従来、生活科と社会科との接続・発展に係わる研究は、空間認識に関わるものがほとんどであったが、第Ⅳ期では、意識的に時間認識の育成を図る原田・酒井・宇都宮(2017)や、生活科教育側からは大村(2020)⁷⁾、社会科教育側からは小林(2018)の両教科の接続・発展を図る教師の力量形成関係の研究が出てきた。このように、第Ⅳ期に至り、生活科と社会科との接続・発展に係わる研究は、様々な観点から行われるようになり、研究の蓄積がある程度なされるようになったと言えよう。今後、このように蓄積された研究から豊かに学びとることが大切となる。

さて、生活科の誕生から四半世紀を経て、生活科は定着してきたと言える一方、マンネリ化すら感じられるという声までである(川上2017)。さらに、「接続を重視するあまり、その学校段階の発達段階や教科の趣旨が曲げられはしないか心配である」(野田2018)という危惧がある。生活科の原点に立ち戻った上で⁸⁾、生活科と社会科との接続・発展を図る時に来ている。第Ⅳ期を生活科と総合の意義再確認・社会科との接続模索期とした次第である。

Ⅲ.おわりに

生活科と社会科との接続・発展に関わる実践・研究の動向を俯瞰した結果、両教科の接続・発展を図る授業づくりに関わる実践・研究は、まず社会科教育側から積極的に行われた。生活教育側から両教科の接続・発展を図る授業づくりに関わる実践・研究が盛んとなったのは、第Ⅲ期以降である。これは、生活科教育界にとっては、新教科生活科の確立がまずめざされたからであろう。教科確立に腐心するうちに、総合的な学習の時間が新設され、それとの接続・発展に関心が向き、さらにほどなくして学力低下問題が起きると、社会科との接続・発展がなかなか俎上にあがらなかった。やっと、第Ⅲ期以降になり、生活科教育側からの社会科との接続・発展に関わる研究が本格的に出

てくるようになった。

両教科の先行実践・研究の動向を俯瞰し、生活科と社会科との接続・発展を図る授業づくりに係わる知見を抽出すれば、以下の通りとなる。

- ① 生活科は自立した教科であり、社会科等の準備教科ではないという前提に立ち、生活科固有の論理を大切にする。
- ② 生活科では、空間認識、時間認識、政治認識、経済認識、環境認識、異文化認識という社会科に直接発展する要素を含んだ学習が可能である。
- ③ 生活科では、空間認識を基軸とした「たんけん」学習を大単元で構想し、もの・こと・ひととの関わりを深めつつ、様々な表現活動を行ない、空間的認識だけでなく、②の様々な認識の形成に努める。
- ④ 学習指導要領の改訂を越えて生き続ける実践や研究があるにもかかわらず、あまりに顧みられない。そこで、生活科と社会科との接続・発展を図る授業づくりに関わる従来の優れた研究及び実践に学び、授業開発に生かしていく⁹⁾。
- ⑤ 生活科と社会科との研究交流を行ない、互いの成果を学び合い、授業開発に生かしていく。
さて、今までふれられずに来た重要と思われることを述べて、終わりとしたい。先行研究を検討し、平成の大合併による広域行政化により、子ども達だけでなく大人も含めて我々のまち意識が希薄化する問題（伊藤2008）に対し、生活科教育側も社会科教育側も問題意識が全くないと感じる。生活科では「ふるさと学習」が標榜され¹⁰⁾、今後は人口が減少し地方喪失も言われる状況を考えるなら、先の問題は生活科教育における大きな課題であろう。伊藤（2006）は、平成の大合併により同じ市町村となった地域内の学校間で地域学習の成果を交流する有効性を説いた。生活科では、他の市町村の学校との交流学習がある（丹伊田1994、小笠原1998）。これには、我々のまち意識の希薄化問題からではなく、活動の広がりや地域の良さを知る点からの実践だが、このような先行

研究に学び、先の問題に取り組みたい。また 幸か不幸か、コロナ禍によってオンラインでのやり取りが急激に進展した。このことは従来よりも、学校間交流がしやすくなったことを意味している。そこで、生活科と社会科との接続・発展を図る授業づくりに係わる新たな知見として、次のことを挙げる。

- ⑥ 同じ市町村にある学校と③の成果を交流しあい、わたしたちのまち意識を育成する。

註

1) 関係学会誌及び大学紀要等の学術雑誌の論文をまとめた。また、書名に「生活科と社会科との接続・発展」等に係わる文言のある書籍も位置づけた。

表1の「生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（社会科教育関係）」欄の括弧は、社会科教育関係者による生活科授業構成そのものに係わっている。必ずしも社会科との接続を意識していない。だが、社会科教育関係者の研究であり、自ずと社会科との関連が読み取れる。「生活科と社会科との接続・発展等に係わる研究（生活科教育関係）」欄の括弧は、社会科との接続をうたわないが、読み解くと社会科との関連が見られるものである。なお、紙面の関係から表1に未掲載の文献のみ、文献に掲載した。

2) 1992年の日本生活科教育学会第1回大会第3分科会が「他教科に生きる生活科の可能性」であり、1993年の第2回大会第6分科会が「他教科の関連をどうすればよいか」だった。第2回大会では、馬野範雄（社会科出自の附属小学校教員、後に生活科・社会科の研究者に転じる）が「生活科の理念を生かした社会科学習」を提案する。当初から、生活科教育界も他教科との関わりは考えていたが、大会の様子をまとめた生活科授業研究の特集名を見れば、それは副次的なものであったことが分かる。新しい柔軟な学会という性格もあるだろうが、教科教育関係の他

学会では珍しい授業公開がもたれ（同学会は現在に至るまで学会時に授業公開がもたれている）、まずは生活科授業の確立が目指されたと考えられる。なお、分科会の詳細は、日本生活科教育学会事務局（1993, 1994）を参照。

3) 生活科新設以前から、社会科教育界では低学年社会科に対する論議があった。明治図書の教育科学 社会科教育275号では、「社会科改革の提言①－低学年社会科をどうするか」を特集している。同号で、伊藤（1985）は菅原（1983）の実践に学び、低学年社会科批判に事実で応える必要性を述べた。歴史教育者協議会編集の1986年の歴史地理教育398号も、「低学年社会科はなくてもよいのか」を特集している。これらの特集号には、低学年社会科の優れた遺産に学ぶ有効性や低学年での社会認識形成を図る必要性が指摘されている。

4) 出力型授業観とは、「授業を『子どもがもっている何かを出させる場』として組織していこうとする授業観である。『何か』とは、一般に知識とか思考力とかよばれるものである。」（小西 1997, 56-57）。出力型授業観の詳細については小西（1997）を参照。

今では知識の活用を大切にすることは当然であるが、知識の活用について一般的に言われるようになったのは、平成20年度学習指導要領以降である。

5) 無藤（2003）は、生活科での気づきが発展する中で、中学年以降の教科とつながっていくと述べる。どのように社会科とつながるかについて具体的記述はない。ただ、場所の可能性が述べられていて、注目される。

6) 西野・中野（2019）が述べている「生活科で培ってきた主体的に学んでいく子どもたちの態度が社会科の学習内容も主体的に学びとることに繋がる場面も見られた。」や「生活科で大切にしてきた身近な世界との関わりから体験を通してその世界を広げていくことによりあるフィールドと別のフィールドを比較したりさま

ざまなフィールドに共通している普遍的な土地利用の仕方に気づいたりすることができるのである。」には既視感を抱く。前者は、伊藤（1993）でも見られた態度であり、後者は、初志の会と関わりのある者なら当然のことと考えることであろう。

7) 大村（2020）の中学年以降の教科の「見方・考え方」の自覚を促す教師の構えの内実を明確にしたことは大変意味のあることである。ただ、ここで述べられていることの多くは、社会科の初志の会と関わりのある者なら、どこかで耳にしたことと感じられよう。例えば、「各教科などの特質としての『見方・考え方』のつながりを重視した時の、生活科における教師の重要な関わり方の前提となるのは、中学年の教科等で必要な「見方・考え方」を直接的に指導するような能力ではなく、児童の対象との関わりの中で芽生えた『見方・考え方』の具体的な姿を検知するセンサーを備えた構えなのである。」ということは、表現こそ違いますが考え方は、極めて似ていると感じられる。

8) 生活科の意味を問うた研究に川上（2017）があり、生活科の原点に立って問い直した研究に、馬居（2014a, 2014b）がある。

9) 現在、学習指導要領レベルでも生活科と社会科との接続が問われている。まず、自教科内での接続・発展に関わる先行研究や実践に学び、研究と実践の積み上げが求められる。しかしながら、両教科の接続・発展に関わる実践・研究の動向を俯瞰して、先の姿勢が極めて弱いと感じている。先行研究の検討をしたといっても、都合の良いつまみ食いの検討やタイムスパンの短い検討が多い。生活科と社会科との接続・発展に関わる研究は、第I期に社会科教育側から相当数行われたが、現在それらの成果は埋もれてしまっているような状況が、その証左と言える。先行実践・研究の検討が十分に行われなければ、研究の積み上げが遅々として進まず、授業の科学化を図ることもおぼつかなくなる。さ

- らに、生活科と社会科との接続・発展に係わる研究の蓄積がある程度なされた今後は、自教科内でのレビューワークを十分した上で、教科の垣根をも越え、生活科教育側は社会科教育の接続・発展に関わる成果に、社会科教育側は生活科教育の接続・発展に関わる成果に学び、研究の深化を図ることが求められる。
- 10) 古川 (2017) は、生活科や総合的な学習の時間はふるさと学習であると述べている。
- 文献**
- 安藤正紀 (1991) 『子どもたちの秘密基地』農文協, 169p.
- 伊藤裕康 (1985) 「事実を踏まえて考える日常生活から、“なぜ” “どうして” と問題を見つける目を育てる」教育科学 社会科教育275号, 6
- 伊藤裕康 (1993) 「児童館はあと一つどこに作るか—「じまん」から「提案」へ—」教育科学 社会科教育379, 109-114
- 伊藤裕康 (1994) 「〈生活科〉「世界で1つの年賀状」からぼくらの御津南郵便局へ」, 小西正雄編著『提案する社会科3 これが出来型の“舞台装置だ”』, 36-45, 明治図書
- 伊藤裕康 (1997) 『提案する社会科5 出力型授業づくりへの挑戦』明治図書
- 伊藤裕康 (2006) 「市町村合併時代の小学校社会科地域学習と副読本」地理学報告102, 1-15
- 伊藤裕康 (2008) 「社会科副読本に関わる実践及び研究の歴史から見た社会科地域学習の現状と課題」香川大学教育実践総合研究17, 1-13
- 岩本廣美 (1989) 『フィールドで伸びる子どもたち—探検・地図・自然と学習』日本書籍, 171p.
- 小西正雄 (1997) 『消える授業 残る授業—学校神話の崩壊のなかで』明治図書, 151p
- 馬居政幸 (2014a) 「原点から問い直す生活科の未来 (1) —誕生期に何が論じられたか? —」静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学編) 64, 15-46
- 馬居政幸 (2014b) 「原点から問い直す生活科の未来 (2) —誕生期の活動で学んだこと—」静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学編) 45, 39-70
- 神永典郎 (2018) 「生活科の継承と刷新—自立し生活を豊かにしていく, よき生活者の育成を目指して—」せいかつか&そうごう25, 8-17
- 川上具美 (2017) 「低学年社会科および生活科教育実践の比較分析—体験的な活動がもたらした変化とは—」西南学院大学人間科学論集第13巻第1号, 37-68
- 久保雅英 (1997) 「親しまれる『坂』の名前をつけるには」小西正雄『未来志向の社会科授業づくり』東京書籍, 32-44
- 小西正雄 (1992) 『提案する社会科—未来志向の教材開発—』明治図書
- 菅原恭正・大沢勝也編著 (1983) 『低学年社会科の授業—地域にねざした社会認識を育てる—』日本標準, 159p.
- 田村学 (2015) 「生活科・総合的な学習の時間と学力」せいかつか&そうごう22, 4-11
- 寺本潔・池俊介 (1990) 『アイデアいっぱい地図授業—絵地図から地球儀まで—』日本書籍, 185p.
- 寺本潔 (1993) 『感性が咲く生活科 授業展開への道標 [たんけん・ひみつ・じまん]』大日本図書, 213p.
- 日本生活科教育学会事務局 (1993) 生活科授業研究27 特集生活科の教材開発と授業づくり, 77-82
- 日本生活科教育学会事務局 (1994) 生活科授業研究39 特集生活科授業—記録のとり方と分析検討への提言, 117-125
- 野田敦敬 (2015) 「生活科で育った学力についての調査研究 (2013)」せいかつか&そうごう22, 32-43
- 野田敦敬 (2018) 「自立への基礎を養う生活科, 地域への愛着を深める総合的学習」せいかつか&そうごう25, 5
- 古川鉄治 (2017) 「『生活科』『総合的な学習の時間』

間』はふるさと学習」せいかつか&そうごう

24, 1

無藤隆 (2003)「生活科の授業から始めるカリキュ

ラムづくり」せいかつか&そうごう10, 4-11